名古屋高等商業学校

―新制名古屋大学の包括学校②―

堀田慎一郎

名大史ブックレット
10

名大史ブックレット　10

名古屋高等商業学校

―新制名古屋大学の包括学校②―

堀田　慎一郎

目　次

はじめに……2
一　名高商の創設……3
二　名高商の教育と研究……10
三　初代校長・渡辺龍聖……23
四　学生たちと学園生活……31
五　戦時下の名高商……44
六　名経専から名大経済学部へ……51
おわりに……57

はじめに

名古屋大学経済学部の前身にあたる名古屋高等商業学校（名高商）は、産業経営をになう人材を養成するため、一九二〇（大正九）年に設置されました。全国で六番めの官立高等商業学校です。その後、戦時下の一九四四（昭和一九）年に名古屋工業経営専門学校と名古屋経済専門学校（名経専）に改組、戦後の四六年には名経専に統一され、最後は新制名古屋大学に包括される形となって、一九五一年に廃止されました。

その約三〇年間は、所在地の名古屋市でいえば、日本屈指の産業都市としての地位を確立して一つの絶頂期をむかえながら、戦争によって一度は壊滅し、さらに復興へという歴史の中にありました。また学校としては、戦争とファシズムによる制約をうけながらも、初代校長渡辺龍聖が確立した特色ある教育と校風を誇った三〇年でもあります。

本書は、この名高商の、創設経緯から廃止に至るまでの歴史を分かりやすく紹介するものです。

一、名高商の創設

◆近代の商業教育と高等商業学校

明治維新後、「殖産興業」をスローガンに近代産業の育成をはかってきた日本ですが、一八八〇年代から企業勃興期が始まり、日清戦争後の一八九〇年代後半にはいわゆる産業革命がおこり、軽工業の著しい発展が見られました。全国に商業学校が続々と設置され、一八九九（明治三二）年の実業学校令、一九〇三年の専門学校令により、高等専門教育の高等商業学校、中等教育の商業学校、初等補助教育の商業補習学校という、商業教育の体系が確立しました。

官立の商業専門学校では、一九〇二年、神戸高等商業学校が設置され、高等商業学校が東京高等商業学校と改称されます。一九〇五年には山口高等商業学校と長崎高等商業学校が、一九一〇年には小樽高等商業学校が設置されました。

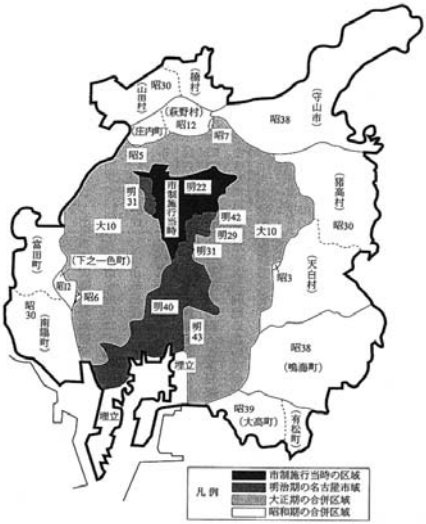
戦前の商業専門教育は、特に大正前期までは、ほとんど官公立の学校によって担われましたから、その希少性とあいまって、地域への高等商業学校の誘致合戦は激しいものになったのです。

◆名古屋市の膨張と第一次世界大戦

名古屋市は、一八八九（明治二二）年の市制施行にともなって誕生しました。しかし当時の名古屋市域は、図のように現在に比べてきわめてせまく、人口も一六万人程度で、必ずしも突出した存在だったわけではありません。

その後、繊維業や陶磁器業、時計業などの産業発展により、日露戦争後の一九〇六年には、人口が三〇万人を突破するようになりました。しかし、もはやそのせまい市域では、増加を続ける産業施設と人口を吸収することは困難でした。名古屋市は周辺地域を次々に吸収合併し、日本有数の産業都市へと成長していったのです。

特に、第一次世界大戦（一九一四～一八年）による好景気は名古屋の工業を活気づけ、その産業発展と都市化を加速させました。一九二一（大正一〇）年には周辺町村を大合併し、人口でも約六二万人と、東京



名古屋市域の変遷
（『新修名古屋市史』第５巻より）

市、大阪市につぐ全国第三位の大都市になったのです。これ以後も、「大名古屋」のスローガンの下、日中戦争が開始されるまで市の膨張は続きました。

しかし名古屋には、産業発展をさらに推進するにあたり、その人材を養成する商業専門教育機関を近くに持たないという大きな問題がありました。

◆「第六高等商業学校」の誘致

文部省でも、六番めの官立高等商業学校を設置する必要を認め、その予算を一九一八（大正七）年度に計上し、これが帝国議会を通過していましたが、設置場所は未定でした。

名古屋市は、以前より有望視されていましたが、他にも静岡市や松山市などの有力候補があり、予断のならない状況にありました。誘致運動は、財界やジャーナリズムの強い要望を背景に、愛知県や名古屋市が中心となって行われました。当時の松井茂知事は、文部省や内務省を訪ね、高等商業学校を名古屋に、高等農林学校を三河に新設するように陳情しました。当時の愛知県には、県立医学専門学校（一九〇三年昇格、現名古屋大学医学部）と官立名古屋高等工業学校（一九〇五年創設、現名古屋工業大学）という二つの専門学校がありました。これらに商業と農林業を加えて、愛知県が一そろえ持とうという構想です。当時、大学をふくめ、この四分野の官公立高等教育機関を備えていたのは、東京府以外にはなかったのです。

高等商業学校については、松井知事に加え、佐藤孝三郎名古屋市長が誘致に奔走しました。愛知県選出の代議士も政府筋に陳情したようです。こうして名古屋市への設置が内定することになりました。ただ高等農林学校については、政府の承認を得られませんでした。

◆地元からの寄付

ただ政府は無条件に設置を認めたわけではなく、多くの経費を県が国に寄付することを条件にしていました。これは珍しいことではなく、例えば愛知県では、一九〇八（明治四一）年に設置された第八高等学校（名大旧教養部、現情報文化学部）も、二〇（大正九）年に県立大学に昇格した愛知医科大学（現名大医学部）も、また三九（昭和一四）年に創立される名古屋帝国大学（現名大）も、同じように地元からの多額の寄付によるものです。

松井知事は、一九一八年五月に臨時県会を開き、この年をふくめた四年間の予算から、合計六四万円を国への寄付金として支出する議案を提出しました。一八年度における愛知県の歳入総額が約七二〇万円ですから、その一割近くにあたる大変な金額です。この寄付金の負担割合をめぐり、名古屋市とそれ以外の地域の議員が対立する一幕もありましたが、最終的には原案可決されています。またこのうちの二〇万円は、名古屋市が負担することになりました。

さらに県は、学校敷地の買収経費の一部一万八〇〇〇円も負担しています。しかも、この敷

西南方向から見た名高商（「名古屋高等商業学校絵葉書」）

地が文部省に引きわたされた時には、県が整地と基礎工事を完了していたといいますから、まさに至れり尽くせりの観があります。結局、政府が一九一八年度から五年間に、名高商創立費として支出した総額が約一〇六万円ですから、創立総経費の三分の一以上を地元が負担したことになります。

いずれにせよ名高商は、地元の大きな期待と協力の下に創立されたものといえそうです。

◆名高商の地

そして、第八高等学校から東に五〇〇mほど離れた、愛知県愛知郡呼続（よびつぎ）町大字瑞穂字川澄の土地約二万坪（約六万六〇〇〇㎡）が学校敷地として選定されました。現在の名古屋市瑞穂区瑞穂町川澄、名古屋市立大学医学部や附属病院

のある所です。

当時この川澄は、付近一帯見わたすかぎり大根畑が続き、そこに十数件の農家が点在するという土地でした。実際、そこはまだ名古屋市域ではありませんでした。一九二一年八月（名高商開校三ヵ月後）、合併にともない市域に編入され、名古屋市南区瑞穂町字川澄になったのです。名高商の地は、名古屋市の急速な膨張を象徴する地域でもありました。

◆名高商の誕生

そしていよいよ一九二〇（大正九）年一一月二七日、勅令第五五一号により名古屋高等商業学校（名高商）が設置されました。「名古屋高等商業学校規則」が定められたのは、翌二一年二月二四日です。そして四月一八日、小樽高等商業学校校長の渡辺龍聖が校長事務取扱となり、一一月には正式に初代校長に就任しました。

二月三日には初年度の生徒募集が発表され、一六〇人の募集に対し一四四八名もの志願者が集まりました。倍率約九倍のせまき門です。結局、一六七名が初年度の入学者となりました。

教員は、授業開始時では、教授一〇、助教授四、書記四という定員すら充足しておらず、のちに二代校長となる国松豊教授をはじめ、三人の教授と六人の講師で出発することになりました（教員の定員は、のち最大時で教授二五、助教授八となりました）。事務員の数も少なく、

事務部の課長や主任を教授が兼任していたのです。

学生と教員がそろい、いよいよ一九二一年五月二日から授業が開始されました。開校記念日は五月一日とされ、以後この日は休業日となりました。

◆校舎の建設

さて、授業が始まったことで、ソフトの面では学校としての最低限の機能をはたすようになった名高商ですが、ハードの面ではきわめて不十分なままでのスタートでした。

授業開始の時点では、本館と寄宿舎の一部ができていた程度で、授業のかたわらで建築工事が行われているという状況でした。しかも何度も暴風雨にみまわれ、工事は順調には進みませんでした。それでも、一九二一年度のうちには、教室、事務室、図書室、研究室、寄宿舎、寄宿舎食堂、賄所、浴室、雨天体操場、生徒控室などが竣工しました。いずれも木造二階か一階です。この年度の名高商キャンパスはさぞかし喧騒であったことでしょう。その後、講堂や商品陳列館、柔剣道場、官舎などが順次整備されることになります。

ハード面でもソフト面でも、名高商はあわただしく出発したのでした。

二、名高商の教育と研究

◆学科構成

この章では、大正期から昭和初期を中心に、名高商の教育と研究について紹介します。

名高商では、三年間の本科が基本となります。これに加えて一九二四（大正一三）年、商工経営科（修業年限一年）が設置されました。なお、商工経営科新設に要する経費は、文部省は負担しないという条件を容れ、これも県からの寄付でまかなわれました。同科は、設置時の説明書によれば、地域の産業振興に必要な、企業経営に関する最新の学理や実験に通じた人物を養成するものとされています。つまり、地域の経済界をになう人材が望まれていたわけです。

◆カリキュラムの概要

カリキュラムを概観しますと、第一学年とそれ以後とで、受講科目がかなり異なっていることが分かります。

第一学年では、簿記や商業通論、商業地理、商業数学など、基礎的な商業科目に加え、国語

商品実験とタイプライター室（「名古屋高等商業学校絵葉書」）

や法学、経済学、数学、理化学などの、教養科目にもかなりの時間を割いていることが特徴です。そして第二学年以降で応用的専門的な商業科目に進むという構成になっています。また三年間を通じてですが、英語を中心とする外国語の授業が多いことも目につきます。

経済人の卵である高等商業学校の学生に、教養豊かな紳士としての風格を求めるのは、渡辺校長の教育方針の特徴でした。

◆特色ある商業教育

しかし高等商業学校ですから、専門的な商業教育がその中心であることは言うまでもありません。

初代校長の渡辺龍聖は、これまでの商業専門教育では重視されていなかった、名高商が大き

な成果を期待する科目として、商業実践、商品実験、商工心理、能率研究などをあげています。

商業実践は、銀行業、保険業、倉庫業、運送業などの模擬会社をつくって実習するものです（擬営実践）。一九二五（大正一四）年に竣工した特別教室はそのための施設ですが、のべ建坪三九六㎡、鉄筋二階という当時としては立派なものでした。

商品実験は、商品の製造やその取り扱い、品質鑑定などを目的とした、科学的な実験です。一九二二年四月に商品実験室が開設され、そこでこの授業が行われました。

もっともこれらの多くは、すでに渡辺校長が小樽高商時代に本格的に導入していたものです。しかし、例えばケースメソッド教授法は、日本の高等商業学校では初めての試みです。これは、ある実例（ケース）について学生に自由討論させる方式の授業で、名高商では株式会社の設立に関するケースが毎年学生に課せられました。

◆商工心理学

商工心理学も、名高商で初めて本格的に導入された学科目です。

これは、商品の生産や販売、購買に関わる人間の適性や心理を研究するものです。この科目を採用した理由について、渡辺校長は次のように語っています。

商工心理学実験（名大経済学部提供）

今までの経済学者は資本のことのみを研究して人のことは哲学者の解剖のままに任して置きました。然るに哲学者はまた資本嫌で、金銭から人を切り離して架空的に人をおもちゃにしておりました。然るに前世紀にフェヒナーが物理の法則を心理に応用して以来、実験心理が現れ、それが今日の商工心理の基となりまして、それが欧米の産業界に適用せられ出したは欧州大戦以後のことであります。

（『乾甫式辞集』五九頁）

欧州大戦とは第一世界大戦（一九一四～一八年）のことです。この学科は、まさに経営学の最先端を取り入れた名高商の目玉であったといえるでしょう。

また渡辺校長は、この商工心理学の採用によ

る将来の夢を次のようにも語っています。

…近き将来には松坂屋の入口に我校の卒業生が巧なる心理機械をすえ付け、御客がドーアをあけると、「ア此御客さんは婚礼の調度に入らしったのである、三階の御祝儀調度室に御案内…ア此御客さんは今晩の来客に食糧品購入に入らしった、地下室に御案内…」と云う時が、近い内に来ると信じて疑いませぬ。近いと云うても百年後かも知れませぬ。

（『乾甫式辞集』六〇頁）

今から二〇年後に、このような「心理機械」ができるかどうかは別として、こうした消費者の心理を重視する考え方は、今や常識となっていると言ってよいでしょう。

◆名高商の二大信条

次に、渡辺が確立しようとした名高商の校風を端的に示すのは、やはり「二大信条」ということになるでしょう。毎年の入学者に示された、名高商の基本教育方針です。それは、「学生は学生らしくあること」、「学生は学生の本分を忘るるな」というものでした。

学生らしく、というのは、具体的には髪型や服装、言葉使い、行動などが学生らしいという

意味であり、髪型では「五分刈り頭が学生にふさわしい」とされました。そして学生の本分とは、「入学の目的を忘るるな」という意味で、病気など不可抗力の理由以外では、決して授業に欠席しないこととされました。一九三〇（昭和五）年からは、「学校は家庭の延長なり」、「学校は生徒の健康保護所なり」という「二大要望」が加わっています。

渡辺は、これらを規則や命令ではなく、学生の自発性によって実現しようとしました。教育は個性の違いを尊重しなければならず、共通の規則で束縛するは好ましくないので、できるだけ規則は制定しないようにすると述べています。

ただし、例えば五分刈りは、規則にはなっていないようですが、渡辺校長の強い意向により事実上の不文律になりました。二大信条がどのくらい徹底されたかは、『剣陵十周年史』（一九三一年刊）の次の文章が物語っています。

渡辺龍聖

…渡辺校長のモットーたる学生らしくの趣旨は、隈なく行き渡り、頭髪の五分刈以下は全く生徒の慣習となり了り、注意を受くる者とてなく、其の他、苟しくも学生に相応しからざる言語動作風采等は見んと欲するも見出す能わず。日々の授業出席率は常に九十八％

以上にして、全国高等専門学校中の驚異とせられ、年々の皆勤者優に二百名を算し、卒業式毎に皆勤賞を授与さるるもの百名に垂んとす。（九五頁）

◆人格主義と商業教育

渡辺といえば、その人格主義教育が有名です。そしてそれは、商業とも深い関係を持つものと考えられていました。例えば渡辺は、一九二二（大正一一）年の『学友会誌』創刊号の巻頭文「商人と人格」で次のように書いています。

今日の商人は、ただ徒らに算盤や文書を好くするのみでは駄目である。人格高く修養円満にして然も才能あるものでなからねばならぬ。

それでは、なぜ企業経営者はそうあらなければならないのか。渡辺は続けて、

…今や華府会議の結果、軍備縮小が行われ、世界各国民は商業に向って集中されているのである。此れからは商戦の時代である。過去に於ては軍人が国威発揚のために戦ったのであるが、今日は商人が軍人に代って戦わねばならない。

と述べています。第一次世界大戦後を国際経済競争の時代ととらえ、国家のために産業戦士として戦う人材となることが求められていたのでした。

◆教員の特色

次に、こうした渡辺校長の教育方針の下、名高商で教鞭をとった教員たちについて簡単にふれておきましょう。

教員の特色は、第一に、名高商のカリキュラムの特徴を活かすため、渡辺校長がそれにふさわしい気鋭の教員を集めたことです。教養科目だけではなく、専門科目の授業を、商業学や経済学以外を専門とする教員が担当していたことが注目されます。

例えば、商品理化学・商品実験を担当した小原亀太郎の専門は理学ですし、これも商品実験担当の近藤良男は、東京帝国大学を卒業してすぐに名高商に赴任してきましたが、薬学を専門としていました。商工心理学の古賀行義は心理学を修めた人です。

◆外国人教師

第二の特徴は、多くの外国人教師がいたことです。授業開始二年めには、早くも五人の外国

人教師が赴任しています。以来、大正期から昭和初期を中心に、のべ一七人を数えました。多くは外国語担当でしたが、商業関係の専門科目を受け持った教師もいます。

しかもその中には、E・F・ペンローズ、A・アシュトンなど、著名な経済学者もいました。彼らは、来日中にも積極的な研究を行い、名高商の研究活動にも大きな貢献をしています。またG・C・アレンは、イギリスへの帰国後、日本での経験を出発点にして日本経済を研究テーマにしました。戦後は、日本の経済発展のための好意的な助言や、日英文化交流などに尽力し、勲三等旭日中綬章と国際交流基金賞をうけています。

◆産業調査室と赤松要

名高商は研究活動も非常に活発で、しかも大きな業績を上げていたことは特筆されるべきでしょう。その代表的なものとして、産業調査室の設置とその研究業績があげられます。

この産業調査室の中心になったのが赤松要（かなめ）です。赤松は、神戸高等商業学校（現神戸大学経済学部・経営学部）、東京高等商業学校（のち東京商科大学から一橋大学）専攻部を卒業し、一九二一（大正一〇）年、開校直後の名高商に講師として赴任しました（翌年教授に昇格）。時に二六歳の若さです。以後、一九三九（昭和一四）年に東京商科大学へ転ずるまで、一八年にわたって名高商で勤務しました。戦後には、雁行形態論や金廃貨論で著名な、世界的な国際

渡欧当時の赤松要（左から二番め、『学問遍路』より）

経済学者として活躍しています。

その赤松は、一九二四年から二六年にかけて欧米諸国に留学しますが、特にアメリカのハーバード大学で大きな触発をうけて帰国します。そしてさっそく渡辺校長に対し、産業調査室の設置を進言しました。渡辺は、言下にこれを承認したといいます。そもそも、赤松にハーバードへ立ち寄るよう命じたのは渡辺ですから、そうなるように計算していたのかもしれません。

◆名高商生産指数

そして一九二六年、小さな組織ではありますが、電動式計算機などの最新機器を備えた産業調査室が発足しました。赤松はその主任となり、宮田喜代蔵、郡菊之助、酒井正兵衛各教授を構成員とし、外国人教師ペンローズもスタッフに

加わっていました。

ここでは、資料の収集による重要産業の経営調査、最新機器による景気循環の実証研究、ハーバード式ケースメソッドの研究などが行われました。そして一九三三（昭和八）年には、四〇年近くもの長期間を対象に、日本の全生産物を網羅した生産指数を発表します。これは日本で初めてのものであると同時に、世界的にも注目された最先端の業績であり、「名高商生産指数」と呼ばれました。

産業調査室は、敗戦後の一時中断をへて、一九五〇年に名古屋大学経済学部で再発足し、五三年には経済調査室に改組されています。そして現在は大学院経済学研究科附属国際経済動態研究センターとなり、その実証主義の伝統を現在に伝えています。

◆「名古屋高商は大学だ」

このように、名高商の教員による研究活動はきわめて旺盛でした。そうした研究発表の場として名古屋高等商業学校商業経済学会が設立され、その機関誌として一九二三（大正一二）年に創刊されたのが『商業経済論叢』です。渡辺校長は発刊の辞で、専門教育機関が社会から隔絶している時代は去り、さらに教育機関が「特殊階級」にかたよれば社会の堅実性が失われるとして、教育と社会の結合を説いています。

『商業経済論叢』（名古屋大学附属中央図書館所蔵）

その他にも、一九三二（昭和七）年には、商業美術研究会から『商業美術論集』が創刊されました。商業美術とは、商品の広告や宣伝、ライトアップなどの効果的なあり方を、消費者心理などの分析によって研究しようというものです。当時における最先端の研究分野でした。さらに産業物理学教室、応用生物学会などというものまでありました。

赤松要は、名高商を去ってまもなく、学友会機関誌『剣陵』に寄せた文章の中で次のように書いています。

剣陵を離れてみて剣陵の価値がわかる。北陸の畏友O教授は名古屋に来るたびに『名古屋高商は大学だ』と言った。それは決して御世辞だけではない。実際に剣陵学園は商業経

済の単科大学にあたるのみではなく、総合大学として偉容を有することは全く驚異に値する。名高商は単なる専門学校の枠をこえ、すでに大学としての内実をそなえていたのでした。

◆「名古屋商業大学」と渡辺校長

そうだとすれば、名高商を大学に昇格させようという運動が起こっても不思議ではありません。おりしも一九一八（大正七）年に大学令が制定され、帝国大学以外にも大学の存在が認められるようになっていました。実際に、早くも一九二四年には同窓会其湛（きたん）会が、その創立と同時に「名古屋商業大学期成同盟会」を結成しています。ただ同会の活動には不明な点が多く、巨額の基金を有しながら、史料で確認される範囲では目立った活動をしていません。

このことに影響を与えたと考えられるのは、渡辺校長の大学昇格に対する独自の見解です。渡辺は、専門学校を大学の格下と見なす文部省や社会の風潮を批判し、両者は役割を分担する対等な最高学府であると主張しました。大学は理論とその応用を研究し、専門学校は実際を主として、その結果理論に到達するというのです。

渡辺は、実践主義、実証主義から結果として理論に及ぼすという、専門学校としての名高商の学風に誇りを持っていたのでしょう。

三、初代校長・渡辺龍聖

◆名高商の歴代校長

名高商の校長は、その約三〇年間の歴史の中で五代を数えました（事務取扱を除く）。初代・渡辺龍聖（一九二一年一一月～三五年五月）、二代・国松豊（三五年五月～四五年九月）、三代・高瀬五郎（四五年九月～四六年三月）、四代・野本悌之助（四六年五月～四九年七月）、五代・酒井正兵衛（四九年七月～五一年三月）です。

小樽高商時代の渡辺龍聖
（小樽商科大学百年史編纂室提供）

四代の高瀬は官僚でしたが、これは敗戦直後の臨時校長的な意味合いが強く、その他はいずれも名高商創立期からの教員です。

そして最も長く校長を務めたのが、渡辺龍聖（わたなべ・りゅうせい、一八六二？―一九四五）です。事務取扱の期間をふくめれば、全史の半分近くにあたる約十四年間、名高商の経営責任

者の立場にありました。前章の内容からも分かるように、新設された名高商の教育や校風の基礎は、この渡辺の手で創られたとも言えます。

ここでは、少しページを割いて、この渡辺龍聖について紹介します。

◆生いたちと経歴

渡辺龍聖の出生については、実はあまり詳しいことは分かっていません。一八六二（文久二）年（一説には一八六五年）、越後国古志郡吉水村（現新潟県栃尾市）に、加藤周浄の長男として生まれたとされます。その後一八八六（明治一九）年に渡辺伝蔵の養子となりました。

渡辺は、創立されたばかりの東京専門学校（現早稲田大学）に入学、一八八七年に英語本科を卒業し、帝国大学文科大学（現東京大学文学部）哲学科に入学しました。そして八九年（一説には八八年）からアメリカに留学し、ニューヨーク州のコーネル大学大学院から哲学博士号を取得しています。日清戦争たけなわの九四年一一月に帰国し、翌年には高等師範学校（戦後の東京教育大学、現筑波大学）の講師、すぐに教授となりました。

高等師範学校（一九〇二年から東京高等師範学校）では、倫理教育学を担当し、附属音楽学校の教授として学校経営にも参画しました。そして一九〇一年には、高師から独立した東京音楽学校の校長に就任します。同校の学生であった滝廉太郎に目をかけ、いろいろと世話をした

というエピソードも残っています。

翌年には、小村寿太郎外務大臣から依頼をうけた東京高師校長嘉納治五郎の推薦で、清国（当時の中国）政府直隷総督、袁世凱の学務顧問となりました。以後七年にわたり、清国直隷省の教育改革にあたります。

帰国後は再び東京高師の教授にもどりますが、文部省の清国視察団の団長を務めるなど、教育行政家として高い評価を受けていました。そして一九一一（明治四四）年、留学していたドイツのベルリン大学から急きょ呼びもどされた渡辺は、新設された小樽高等商業学校（小樽高商、現小樽商科大学）の初代校長に就任したのです。

◆小樽高商の初代校長として

小樽高商は前身校がないゼロからのスタートで、渡辺は苦労しながらも、思う存分学校創業者としての手腕をふるうことができました。そして、前章で述べた名高商の教育や校風が、この時に試行錯誤した成果を基礎とするものであったことが分かります。

例えば、名高商教育の基本となった実践主義、科学主義です。名高商でも取り入れられた商業実践、企業実践、商品実験などの学科は、小樽高商が主要科目として本格的に導入したものです。立派な商品実験室や商品陳列館の設置や、各業種の模擬会社を想定して実習する「擬営

小樽高商の石鹸工場（小樽商科大学百年史編纂室提供）

実践」は、そのまま名高商でも行われています。また企業実践のための石鹸（せっけん）工場設立の試みは、名高商では印刷工場（一九二六年建設、建坪一三二㎡、鉄筋一階）として生かされています。

また人格主義教育も同様で、いわゆる紳士教育として提唱されました。士農工商の時代は終わり、これからは経済人が国家の存立や国際関係を左右するものだとして、学生に高い品格を持つ紳士たることを求めました。このため語学を中心とする教養科目も重視していました。

教員についても、名高商の時と同じように、授業科目に合った優秀な若い教師を広く集めています。渡辺が小樽高商から招き寄せ、日本の商品学、商品実験の泰斗となった小原亀太郎もその一人です。外国人教師が多かったことも似ています。

小樽高商の大学昇格運動が始まろうとした時、一人これに異を唱えてブレーキをかけたところなども名高商時代にそっくりです。

◆渡辺の倫理学と商業教育

渡辺は、二つの高等商業学校で、合わせて二四年にもわたって校長を務めたわけですが、その学術的専門は倫理学でした。一九〇〇（明治三三）年に刊行されて版を重ねた『批評的倫理学』はじめ多くの著書があり、倫理学の教科書も書いています。

渡辺の倫理学について、本書で詳しく述べる余裕はありません。ただその特徴として、通俗道徳によくありがちな、欲望を否定し、その抑制のみを強調するものではなかった点は紹介しておきたいと思います。

渡辺の言う「道徳的生活」とは、自己実現をめざす生活のことを指します。欲望を否定せず、むしろそれを「人の生命」「自己の善」であると認め、これをいかにコントロールしながら満足させるかを追求するのが、渡辺の倫理学であったといえます。近代アメリカで発達し、その経済発展に寄与したとされるプラグマティズム（功利主義・実用主義）哲学によく似ています。

こうした倫理学は、渡辺の商業教育の基礎となっていました。帝国主義の時代が終わりに近づき、国際的な経済競争への対応が課題とされていた時代、渡辺の倫理学は商業専門教育に適

合的でした。一見畑ちがいの高等商業学校の校長を歴任したのも、むしろ自然なことであったといえるでしょう。

◆名高商創立委員長

さて、第一章ではふれませんでしたが、渡辺は名高商が創設されるまでのプロセスにも深い関わりがありました。

すでに述べたように、日本で六番めの官立高等商業学校を設置するにあたっては、名古屋以外にも有力候補がありました。この時、文部省の担当局長が意見を求めたところ、渡辺は即座に名古屋と答え、岡田良平文部大臣に意見具申をしたとされています（『剣陵十周年史』二頁）。これが事実とすれば、かねてより渡辺を高く評価していた岡田大臣が、名古屋を選択する一因になったことも十分に考えられます。

そして渡辺は、第六高等商業学校創立委員会の委員長に就任し、名高商の創立計画を指導したでした。つまり渡辺の名高商創業は、すでに創立前のグランドデザインの段階から始まっていたのです。

名高商設置を二ヵ月後にひかえた一九二〇（大正九）年九月、渡辺は文部省の命により欧米を視察します。おそらく彼の地の高等商業教育機関を見て回ったものでしょう。そして満を持

して名高商の赴任したことになります。

◆名高商を去る

名高商時代の渡辺については他章にゆずり、ここで重ねては述べません。

さて、一九三五（昭和一〇）年、創立一五周年を翌年にひかえ、渡辺校長は自らの意思で退職することになりました。教職員から留任の懇請がありましたが、渡辺の決意はかたく、国松豊教授に後事を託したのです。国松は小樽高商時代から渡辺の片腕といわれた人物でした。

渡辺が辞職したのは、すでに七〇歳をこえた高齢もあるでしょうし、あるいは、戦争とファシズムの足音が高まり、名高商の教育理念を推し進めることができなくなる時代の到来を予感してのことでしょうか。

いずれにせよ五月八日、「学生は学生らしくあれ」「学生は学生の本分を忘るるな」という二大信条を最後の言葉として、渡辺は名高商を去ったのです。

◆名古屋に骨をうずめる

一九三八（昭和一三）年、校庭に渡辺の銅像が完成し、五月一五日にその除幕式が行われました。この日は職員学生三〇〇人以上のほか、二〇〇人をこえる来賓が参列したといいます。

渡辺龍聖像

渡辺は、その後も名古屋市内の中区州原町（現昭和区）に居をかまえ、名高商を見守りました。しかし敗戦の年、一九四五年になると空襲が激しくなり、やむなく三重県桑名市に疎開し、そこで敗戦直前の七月、病のため亡くなっています。その墓所は名大のほど近く、八事の興正寺にあります。

渡辺像は、戦時中の金属供出のため失われましたが、一九八〇（昭和五五）年に名高商創立六〇周年を記念して、同窓会キタン会によって名高商のあった名市大・川澄キャンパスの一角に新しい像が建てられました。現在では名大経済学部の中庭で後輩たちを見守っています。

四、学生たちと学園生活

本章では、入学から卒業まで、名高商の学生たちとその学園生活について、学校行事やその他の団体の活動などの様子をまじえながら述べていきます。

◆入学試験

名高商本科の入学資格は、「品行方正の男子」で、中学校もしくは甲種商業学校の卒業者、専門学校入学検定試験合格者、もしくはそれと同等の資格を持つ者とされました。

入学者の選抜は、学科試験と卒業学校での成績、体格審査によってなされます。試験科目は、初年度を例にとると、英語と口頭試問を共通に、中学校卒業者には国語漢文作文、代数・幾何、商業学校卒業者には読書作文、商業算術、商事要項が課されました。

入試倍率は、設置からしばらくは募集人員に対して約一〇倍、昭和に入ってからも五倍以上でした。全国的にみても難関校といってさしつかえないと思います。

◆入学者の傾向

入学者数は、創立から徐々に増加傾向にあり、昭和期に入ってやや落ち着きますが、一九三五（昭和一〇）年をピークに、本科はおおむね二〇〇人から二五〇人の間を推移していました。在校生の総数は、商工経営科などを加えると、三六年のピーク時に八〇〇人、昭和期はおおむね七〇〇人台でした。入学者の平均年齢は、当初はやや高く二一歳に近い年もありましたが、昭和に入ると一八歳代に落ち着くようになります。

出身地の割合ですが、本科生では愛知県の比率が圧倒的に高く、これに岐阜、三重の両県が続きます。この東海三県の比率は、当初は三〇～四〇％でしたが、昭和に入ると六〇％前後の高い値を示しています。現在でも名古屋大学は地元志向の強い大学として有名で、全体の七割近くが東海三県の出身ですが、名高商も同じような性格を持っていたことが分かります。

商工経営科では、東海三県が多いものの当初より五〇％に満たず、さらに減少して戦時期には一〇％台になりました。高い研究水準の評判に、全国から学生が集まった結果でしょうか。

授業料の年額は、開校当時五〇円、一九二五（大正一四）年度から六五円、二九（昭和四）年度から八〇円となりました。一九二九年頃、現在よりはるかに少ない大学卒業者の初任給が平均五〇～六〇円、高等小学校卒業者の日給が八〇銭くらいの時代です。

嚶鳴寮（名大経済学部提供）

◆嚶鳴寮

名高商では、自宅から通う者以外、入学して一年は寮に入ることを義務づけていました。その理由は、寄宿寮規程の第一条「寄宿寮は本校の教育と相俟（あいま）って生徒の教養を完（まつと）うする所とす」に示されています。経済人としての教養を重視する渡辺校長らしい文言です。

寮はいずれも名高商の構内にあり、南・中・北・東・巽（たつみ）の五寮（木造二階）でした。そしてこれらは「嚶鳴（おうめい）寮」と通称されました。嚶鳴とは、鳥が声を合わせてやさしく鳴くさまを言います。一九二四（大正一三）年度の入学者は二二四名で、うち入寮者が一二九名ですから、一年生の半分以上は寮生活をしていたことになります。

嚶鳴寮は、戦後も同じ地に名古屋大学学生寮と

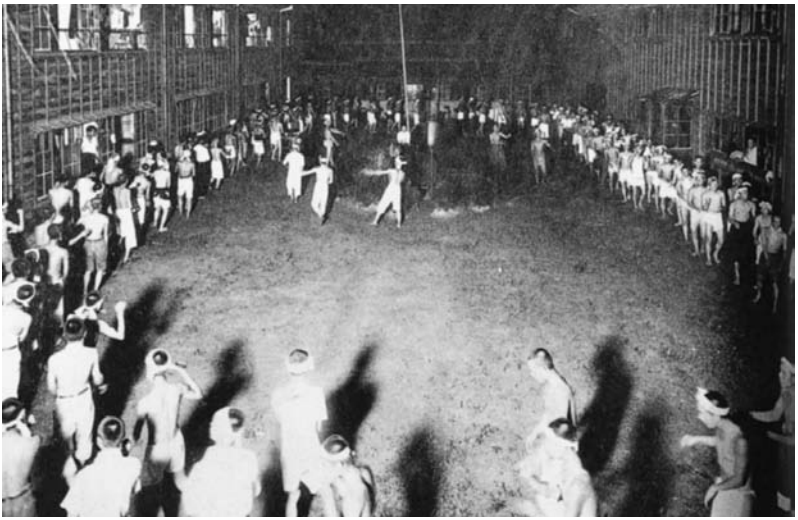
寄宿舎食堂（名大経済学部提供）

して残り、一九六一（昭和三六）年には東山キャンパス近くの昭和区高峰町に新しい寮が新築されましたが、ここでもその名前を継承しました。そして二〇〇二（平成一四）年、鉄筋九階の高層建築として生まれかわり、学生寮「国際嚶鳴館」としてその名をとどめています。

◆寮生活

嚶鳴寮は、生徒監および寮監督教官の指導の下ではありますが、寮生たちが自治的に運営していました。当時の規則類を見てもそれほど厳しいものはなく、比較的自由な寮生活が謳歌されていたようです。

創立当初、渡辺校長から、名高商は名古屋の人々にその名が知れられていないから、大いに宣伝に努めるようにとの訓示があると、寮生は「宣伝」と称して夜の名古屋市街にくり出し、寮が空になるようなことも珍しくなかったとのエピソードも残っています。



寮でのファイヤーストーム（名大経済学部提供）

初期の名高商は、名古屋市といっても名ばかりで、寮生は夜間の外出には提灯を持参したといいますし、通学生は泥道に足をとられて遅刻することもあったそうです。この「宣伝」は、こうした環境の中、名高商生の繁華街への憧れをうかがわせます。

寮の行事としては、各種のイベントでにぎわう寮祭のほか、対寮マッチは熱狂的な雰囲気につつまれました。大勢の学生たちが丸裸になって大合唱し、時には夜の街をねり歩いたというストームも、他校に劣らず活発に行われていました。

◆「剣ヶ丘」とその変貌

学校所在地の通称については、開校の年、生徒大会によって「剣ヶ丘」と決められました。

1933年の名高商空撮写真（中日新聞社提供）

同時に「剣陵」、あるいは「剣陵学園」が名高商の通称、愛称となり、学校内外を問わず広く知られるようになりました。

創立時の名高商は、あたり一面大根畑で、朝は八事丘陵地の灌木林に霧がたちこめ、遠くは熱田の杜から東本願寺、伊勢湾から鈴鹿山脈などが望めました。また校舎の南を走る一本の街道からは、熱田詣でに行く人々の声がすぐに聞こえるという光景の中にありました。「剣」とは、そのような雰囲気と、熱田神宮の御神体、草薙（くさなぎ）の剣のイメージを重ねてのものです。

しかし当時の名古屋市は、その市街地を爆発的に拡大するただなかにありました。とりわけ名高商のあった呼続は、工場進出の著しい地域でした。創立一〇年を記念して同窓会其湛会が刊行した『剣陵十周年史』には、次のように書かれています。

母校の窓より周囲を眺むれば転た今昔の感に堪えず、…母校の付近は市内有数の学校概ね此に集りて、市電東郊線の市内線連絡と桜山（母校西門付近）への延長との為め交通至便となり、名古屋の町は鶴舞公園の東南に著しく発展し、東は八事の山まで、南は遠く呼続・笠寺に至るまで、家又家に埋り、大根畠は最早や其の姿を没し、大小とりどりの住宅其処此処に続々と建てられて、今や見事なる住宅地帯を成し、…その昔、雨降れば東と西との田の水が道を越えて往来する等の様は想像するさえも難く、…新興東郊市街の中に巍然として聳ゆる我等が母黌！

（九五～九六頁）

名高商の地が市街地として変貌していった様子がよく分かります。

◆マーキュリーとカンカン帽

校章バッジのデザインも、熱田の神剣にちなんだものでした。剣の中央にCollege of Commerceの二つのCを勾玉に模して配し、マーキュリーの翼をつけたものです。マーキュリーとは、ローマ神話における商売の神です。

校章のデザイン

制服は、黒ラシャの学帽と黒セルの詰め襟服とされましたが、夏にこの格好で木陰もない道を通学するのは苦痛でした。そこで、帽子はカンカン帽、服も

霜ふりを着ることが流行したといいます。学生の陳情をうけた渡辺校長は、カンカン帽は紳士らしい心を養成するとして、霜ふりも木綿にかぎり略式制服として認めました。

開校の様子を報じる新聞記事によれば、当初は「蛮カラ党」の多かった名高商生でしたが、やがてカンカン帽にマーキュリーをトレードマークとする、「粋な高商さん」と呼ばれたようなスタイルも見られるようになりました。

◆学友会と部活動

開校の年、学友会が設立されました。これは在校生を通常会員、職員を特別会員、卒業者を会友とし、会員相互の親睦と、知識や道徳の養成、身体の鍛錬により堅実な校風をつくることが目的とされました。

学友会活動の中心になっていたのは部活動です。文芸部、弁論部、外国語部、柔道部、剣道部、弓術部、競技（陸上）部、水泳部、相撲部、野球部、庭球部、サッカー部、ラグビー部、籃球（バスケット）部、ホッケー部、卓球部、排球（バレーボール）部、馬術部と、特に運動部は現在でもその中心となっているほとんどがそろっています。

その他にも、俳句会、映画研究会、ＹＭＣＡ、山岳部、マンドリン倶楽部（くらぶ）、謡曲倶楽部、射撃倶楽部、絵画部など、学友会に加盟していない自主サークルが数多くありました。

これぞ空前の快事

清川の覇業成る

見よ名高商の空に日章旗輝く

劇的感激に聲を呑む

熱狂の豊橋

今晩は大提灯行列

花火を合図に

清川禮讃

我らの本懐

清川の金メダルを報ずる新聞（『名古屋新聞』1932年8月14日付夕刊）

◆名高商とスポーツ

戦前の高等教育機関はスポーツ文化の中心であり、各種の大会が盛んに行われました。世界に通用する選手を多く輩出しただけではなく、地域へのスポーツの普及にも大きく貢献していました。

名高商も例外ではありません。各部とも強豪として活躍し、東海地方の大会では第八高等学校などと覇を競い、全国大会にもたびたび出場しています。特に野球部は、アメリカのミシガン大学との交流試合や、満州の実業団と対戦するために中国遠征をおこない、一九三一（昭和六）年の甲子園大会では全国制覇を達成しています。水泳部は一九三〇年の全国高商連盟大会において五種目で新記録を出し、総合得点で優勝しました。

水泳部の清川正二は、在学中に一九三二年のロサンゼルスオリンピックに出場し、一〇〇m背泳ぎで金メダルを獲得しています。名大経済学部の中庭には、これを記念した記念樹と石碑があります。いずれも同窓会キタン会によるものです。

その他にも、柔道の嘉納治五郎などの著名人を講演や指導に招いたり、相撲部の土俵開きで横綱常の花が土俵入りをしたりしています。昭和初期には名古屋で唯一の公認トラックを持ち、運動会に貸したり、中等学校を集めて競技会を開催し、スポーツ振興にも熱心でした。

◆学友会誌『剣陵』

文化部では、学友会誌『剣陵』（一九三〇年に『学友会誌』から改題）の編集を担当する文芸部が花形でした。この『剣陵』には、各部の活動記録のほか、文芸部員や教職員の文芸作品、商業関係のみならず文学・哲学などの論文・評論が多く掲載されています。

初代文芸部長として学友会誌の創刊にあたった赤松要は、その第一号に載せた文中で、「商人である前に人でなからねばならない。物質的利益は、文化的意義であり、そこに商人たる意味の深さが生れる。」と述べています。渡辺校長を中心とする人格主義、商業道徳主義教育の影響がここにも見られます。

また赤松は、自ら短歌を詠み、教員と学生有志による「若菜会」という短歌会で活動したり、

著書『ヘーゲル哲学と経済科学』（一九三一年）を出版して名古屋ヘーゲル研究会を催すなど、経済学にとどまらない、幅広い名高商文化の中心になりました。

◆其湛会

次に、名高商の特徴の一つとして、強固な同窓会組織があげられます。一九二四（大正一三）年五月に設立された其湛（きたん）会がそれです。

其湛会は、発会と同時に「名古屋商業大学期成同盟会」を結成するなど、積極的な活動を展開しました。一九二七（昭和二）年には機関誌『其湛』を創刊し、これは現在でも『キタン新聞』として系譜を保っています。一九三〇年には、名高商のすぐ近く、外国人教師用官舎二階に、「其湛倶楽部（クラブ）」が設立されました。会員の親睦のためのサロンで、宿泊施設も備えていました。これも、キタン会本部と同じ中区錦栄町ビル七階に、キタンクラブとして存続しています。

其湛会は、戦後一九五三年に社団法人其湛会となり、同年設立された名大経済学部同窓会の啓友会と分かれていましたが、六九年に一本化して名古屋大学経済学部同窓会（其湛啓友会）となりました。現在は社団法人キタン会として、八六四二名の会員を有し（二〇〇三年現在）、名古屋を本部に日本全国、海外にも支部を持ち、会員親睦事業や母校助成事業などを活発に

創統の鐘（名大経済学部保存）

其湛塔

行っています。

◆其湛塔と創統の鐘

第一回卒業生たちが卒業記念として建て、名高商のシンボルともなったのが「其湛塔」です。

これは地上一五mの鉄塔で、その塔頂には方位指針とマーキュリーの持つ杖（カドゥケウス）、その下に「創統（そうとう）の鐘」が掛けられました。

同窓会の名称にもなった「其湛」は渡辺校長が選んだもので、由来は『詩経』の一節、「子孫其湛、其湛曰楽」（音楽をかなで酒を酌んで祖先をまつり、一族が集まって楽しむさま）からとられたものと言われています。「創統」は卒業生が選んだ言葉で、自分たちが持っている創造的精神を表現したものとされます。

其湛塔は一九二四（大正一三）年に竣工しましたが、戦時中の鉄材供出のため取り壊されてしまい現存しません。鐘は難を逃れ、歴史を語る貴重なモニュメントとして、名大経済学部で大切に保管されています（右頁の写真参照）。

◆卒業生の進路

進学率はおおむね一〇％前後を上下しています。これは他の官公立高等商業学校と比べてもおおむね平均的な数字です。主要な進学先は、東京商科大学や神戸商業大学などの商業単科大学でした。

次に就職先ですが、まず地域でみると、最初は愛知県内と県外が同じくらいであったのに対し、次第に県内の割合が減り、一九三六（昭和一一）年には全卒業者の一五％を割っています。東海三県のデータがないので断定はできませんが、卒業生が全国で活躍するようになったということでしょう。

次に職種別では、最も多いのが企業（会社・商店）です。当初は卒業者の三割程度でしたが次第に増加し、昭和恐慌の影響で一時停滞しますが、一九三六年には卒業者の六割強、就職者のほとんどを占めるに至っています。戦後、こうした中から日本経済をになう人材が多数輩出されることになりました。

五、戦時下の名高商

◆名高商と「思想問題」

第一世界大戦後、社会主義をはじめとする新思想が広がり、これらが旧来の秩序を破壊するとして警戒する立場からは、「思想問題」と取りざたされました。名高商では、渡辺校長の二大信条と二大要望の下、講演会や修養文庫の設置などの思想対策も行なわれ、同じ名古屋でも、第八高等学校に比べると相対的に平穏であったようです。

もちろん、名高商が「思想問題」と無縁であったわけではなく、一九三三（昭和八）年には学生一五名が検挙され、その後一一名が除籍されました。翌年にも、県下左翼勢力一斉検挙で名高商生六名が検挙、うち四名が除籍処分となっています。

ただ一九三一年の満州事変後も、しばらくは比較的自由な雰囲気があったようです。

◆特別授業

一九三七（昭和一二）年七月七日、盧溝橋事件が勃発し、日本が中国との全面戦争に突入す

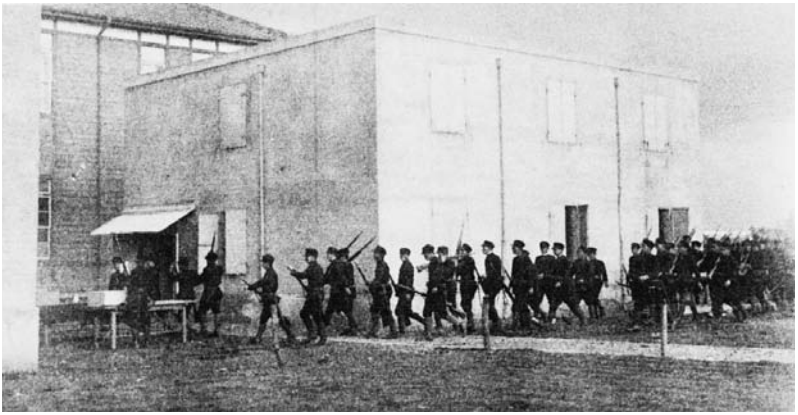
ると、名高商もいよいよ戦争とファシズムの影響が色濃くなっていきました。

文部省の指示にしたがい、特別授業が行われるようになりました。その代表的なものが、一九三六年度から始まった「日本文化講義」です。年に三回から五回、著名な帝国大学教授や帝国議会議員などを講師として、日本文化や皇室の意義、戦争、戦時経済などをテーマする授業が行われ、商工経営科をふくめた在校生全員が出席したとされています。

三五年に退職した渡辺前校長も、講師として名高商を訪れました。「文化と日本精神」（三七年度）、「聖徳太子と我日本文化」（四〇年度）という題目で授業をしたという記録が残っています。一九三九年に創設された名古屋帝国大学関係では、初代総長の渋沢元治による「電気と産業」（四一年度）、医学部附属病院長の勝沼精蔵による「航空医学」（四二年度）という授業が見られます。

また産業報国運動が展開するなか、一九四〇年度と四二年度には産業報国精神特別講義が各一回実施されました。

未だ個人自由主義思想の迷夢に覚めやらぬ輩（やから）の群集する日本国民経済は、少数の自覚せる産業人と多数の無自覚なる産業人が対立し、少能（よ）く多に打ちかって全国民に健全なる国家意識を吹き込むことの如何に困難なるかを思う時、只（ただ）政治の強制による新体制を一縷（いちる）の望み



名高商の銃器庫（1937年建築）

とするより外にありません。

これは、文部省に提出された、四〇年度の特別講義を聴いた名高商生の感想です。

また赤松要も、一九三七年一二月に行われた名高商の特別講演会では、「民族の膨張と戦争」との題目で講演しています。

◆学徒動員

日中戦争の開始は、学生生活にも大きな影響を及ぼしました。一九三七（昭和一二）年には国民精神総動員運動が展開され、三八年に国家総動員法、三九年には国民徴用令が制定され、国民の心身両面が国家総力戦の名の下に総動員されることになりました。もちろん名高商の学生も例外ではありえません。

一九三八年六月九日の閣議決定「集団的勤労作業運動

実施に関する件」により、名高商でも学生の勤労奉仕作業が始まりました。一九三九年には、七月と九月にそれぞれ五日間ずつ市営運動公園造成工事に、さらに一〇月からは毎週二日ずつ、学年ごとに熱田神宮の奉仕作業に参加しています。

三九年に始まった興亜青年勤労報国隊にも名高商生が加わりました。同隊は中国大陸に派遣され、開拓団の作業や軍の後方支援活動を行うものです。名高商からは、教員一名、生徒五名の割当てがあり、五名の学生を山崎英雄教授が引率しています。茨城県で準備訓練を受けた後、中国現地で約一ヵ月の奉仕活動に従事しました。

◆学校報国団・報国隊

そして一九四〇（昭和一五）年になると、一一月に学友会が解散させられ、一二月には文部省の命令により報国団が結成されました。同団には総務部・鍛錬部・国防部・文化部・生活部が置かれ、以前の運動部・文化部はその中の班に振り分けられました。部活動をふくめた学生生活全般が戦時体制に組み込まれたものといえます。

さらに、太平洋戦争直前の一九四一年八月には、学校報国隊が組織されました。同隊は、文部省に本部が設置され、東京・大阪・名古屋など一〇地区に地方部を置く全国的統括組織です。軍隊式の組織を持ち、校長を隊長に、配属将校と教職員の一部からなる本部の下、中隊長以上

には教職員が、小隊長以下には学生がそれぞれあてられました。

名高商報国団誌となった『剣陵』は、この報国隊組織について、「ここに於てか一朝有事の際、校内の警防及校外防護活動並にその他への協力を必要とする為めの全職員、学生生徒を打って一丸とする臨戦体制の基礎は確立整備したわけである」と評しています。ついに名高商そのものが、軍事の一翼をになうようになったのです。

◆在学年限短縮と学徒出陣

当時の軍部と政府は「高度国防国家」を標榜し、あらゆる人的資源を戦争のために投入しました。したがって戦争にとって無駄な教育を省き、学生を一日も早く総動員体制に組み入れようとします。在学年限は次第に短縮され、ついに一九四三年度からは二年とされたのです。

また戦局の悪化により、学生すら兵士として戦場に送り込まれる事態となっていきました。そして四三（昭和一八）年一〇月、学生に対して臨時徴兵検査が行われ、そこで選抜された者は仮卒業証書を授与され、戦場へ向かったのです。名高商では、一年生二〇名、二年生六〇名、商工経営科生一〇名の計九〇名が入営しました。

◆満州へ渡る名高商生

進路の変化としては、軍隊に入る者（軍人・兵役）が急増したことがあります。それまではほとんどいなかったものが、一九三八（昭和一三）には三〇％以上に跳ね上がり、その後二年間は二〇％をこえています。

また、満州（中国東北部）に勤務する卒業生が増えたこともあげられます。一九三一（昭和六）九月、日本の関東軍の謀略により満州事変が勃発し、翌年には関東軍や日本の傀儡（かいらい）国家として満州国が強引に建国されました。日本の支配下に国づくりを進めるための人材が強く求められていたのです。三九年度の就職者のうち約一割が満州に勤務しています。また同じ年、満州で勤務する名高商卒業者は一二〇名というデータもあります。

◆名古屋工業経営専門学校へ

当時の政府は、戦争遂行のための生産力拡充を大きな課題としており、重視されていたのは商業ではなく工業でした。そして一九四三（昭和一八）年一二月、いよいよ政府は高等商業学校の一部を工業専門学校に、他を工業経営専門学校ないし経済専門学校に転換させることを閣議決定したのです。

これをうけて、翌四四年三月二九日に設置されたのが名古屋工業経営専門学校です。そして

残った名高商生の卒業までの措置として、名古屋経済専門学校が併置されることになりました。

名古屋工業経営専門学校規則第一条には、「本校は専門学校令に依り皇国の道に則りて工業経営に関する高等の教育を施し国家有用の人物を練成するを以て目的とす」とあります。「皇国の道」を理解し、国家のための工業経営ができる人材を育てる、これが目的でした。以前のように特徴あるカリキュラムの編成は許されず、皇国民として道徳と、技能の短期習得を重視したものになっています。

◆学校機能の停止

しかし敗色が強まるなか、名古屋工業経営専門学校はその実質を失っていきました。創立直後には、「決戦非常措置要綱に基く学校工場化実施要綱」により、三菱重工名古屋航空機製作所との契約が成立し、学生はいつでも軍需工場に勤労動員されることになりました。名古屋工業経営専門学校は「工場化」されたのです。

そして一九四五（昭和二〇）年三月一八日の閣議決定「決戦教育措置要綱」により、ついに授業を停止しました。こうして学校としての機能を喪失したまま敗戦をむかえたのです。

名経専正門（名大経済学部提供）

六、名経専から名大経済学部へ

◆名古屋経済専門学校への一本化

一九四五（昭和二〇）年八月一五日、日本は連合国に対して降伏し、長い戦争は終わりました。名古屋市に残されたのは一面の焼け野原でした。名古屋は日本有数の大都市であるうえに、航空機を中心とする軍需工場が集まっていたため、米軍による徹底的な空襲を受け、市街地の半分が焼き払われたのです。

名古屋工業経営専門学校も空襲のただなかにあり、実際に校庭に爆弾が落ちたにもかかわらず、幸いにも校舎の被害は一〇％程度と軽いものでした。近くにある第八高等学校が、校舎の

ほとんどを焼失したのとは対照的です。それでも敗戦による混乱は大きく、戦時中に三菱重工業の分工場として提供されていた武道場や雨天体操場などは、なかなか学校に復帰できない状況でした。

そのようななか、一九四六年三月、戦時色の強い名古屋工業経営専門学校は廃止され、名古屋経済専門学校（名経専）に一本化することになりました。本科を経済科と経営科に分け、後者に工業経営専門学校の学生を編入したのです。そして経済科に名高商の課程が復活しましたが、その校名が元にもどることはありませんでした。

◆混乱の中の学生たち

一九四六年度には、戦時中に二年に短縮されていた修業年限が三年に復帰しました。一年生と二年生はそれぞれ二年生、三年生に進み、新入学者も受け入れられました。経済科と経営科ともに八〇名の定員に、それぞれ一八六七名、六五〇名と、名高商時代を上回る倍率の入学志願者が集まりました。またこの年度は、軍隊からの復員や軍関係学校の廃止などにより、定員を超えて多くの転入学者があったことも特徴です。

敗戦の混乱や食糧難で学業に専念するのが難しいなか、学生たちは歯を食いしばって学校に通いました。下宿生の生計の六割以上が食費であったというこの頃、授業の出席率は八六％に

落ちたといいます。しかし、渡辺イズムで一〇〇％近くを誇った時代よりは低いとはいえ、当時の社会状況を考えれば、むしろかなり高いと言えるのではないでしょうか。

また日本国憲法が施行された一九四七年には生徒自治会が結成され、翌年の教育復興闘争や授業値上げ反対のストライキにも参加しました。ただし学校側の記録では、中央の動きに比べると相対的に過激なものではなかったようです。

◆「名古屋経営大学」昇格運動

第二章でふれたように、名高商の大学昇格を望む動きはその創立当初からありましたが、渡辺校長の反対論の影響からか十分に展開しませんでした。それが、敗戦から平和国家としての復興という流れのなかで、その宿望が表面化することになりました。

最初に昇格運動を始めたのは学生たちです。早くも名古屋工業経営専門学校時代の一九四五年（昭和二〇）一二月には学生大会が開かれ、代表者が文部省へ陳情に赴いています。これは上手くいきませんでしたが、学校側も一九四六年二月に大学昇格期成総務委員、事務委員を設置しました。同窓会其湛会も本格的に動き出し、四七年三月には昇格期成学生大会が開催されて「名古屋経営大学昇格に一路邁進」することを決議し、さらに教職員・学生・卒業生を一丸とした「昇格期成同盟」が結成されました。

しかし一方、名古屋帝国大学でも、周辺の高等教育機関を統合して文科系学部や農学部を備え、本格的な総合大学となる構想が模索されていました。名経専は経済学部の母体となることが期待されていたのです。

これに対し、野本悌之助校長の次のようなコメントが新聞に載りました。

本校は名は専門学校だが実質的には大学以上だ。特に新しい学制のねらいが円満な職業教育にありとすれば、本校がすでにハーバード大学で実施されつつある新しい教授法…ケース・メソッド…を採用して好成績をあげつつあるこのゆき方は、いよいよ拡充強化しなければならない。これは総合大学の一学部としての画一的な講義では充足されない大きな問題である。これを単科大学の自由な立場から更に強化してゆくことが学制改革を意義あらしめるものと信じ、教授と生徒と私と三者が同歩調でビジネス・カレッジの建設に進んでいる。

（『中部日本新聞』一九四七年三月一三日）

創立期から名高商と渡辺イズムを支えてきた、野本校長の自負がうかがえて印象的です。

◆名大経済学部へ

もしこの運動が成功し、「名古屋経営大学」が生れていたら、野本校長のいう「ビジネス・カレッジ」として、実際の名大経済学部とはかなり異なった道を進んでいたかもしれません。

これが挫折した経緯については、史料的制約もあって必ずしも明らかではありません。まもなく学校側が其湛会や学生を説得する形で、名古屋大学（四七年一〇月に改称）への合流という方針が定まったのです。

それ以後も曲折がありました。名大文系学部の創設について、文・法・経の三学部案のほか、予算の関係で二学部案、一学部案もあり、政府と名大側、さらに包括校側の思惑がからみあっていたからです。名経専は、二学部（文学部・法経学部）なら妥協するが、一学部なら合流を拒否する姿勢をとりました。

最終的には二学部で決着し、一九四八（昭和二三）年九月一四日、名古屋大学法経学部が設置されました。もっとも、法経学部とはいいながら、経済学科と経営学科は名経専の校舎、法律学科と政治学科は名古屋城の旧陸軍歩兵第六連隊兵舎（名城キャンパス）と、別々の場所で講義は行われました。

そして一九五〇年四月一日、新制名古屋大学の下で法経学部が分割され、現在の経済学部が誕生したのです。

◆名経専の終えん

新制名古屋大学（一九四九年五月三一日〜）への包括後も、名経専はしばらく存続しました。第一学年修了者に名古屋大学への入学資格が認められたことによる退学者は出ましたが、それを補う第二学年の補欠募集も行われ、三六名が合格しています。

そして一九五一（昭和二六）年三月一一日、最後の卒業式が行われました。最後の卒業生たちは、朝鮮戦争の特需景気もあり就職は順調で、一六〇名の卒業生に対し何倍もの求人件数があったと新聞には報じられています。そして三月三一日をもって名経専は廃止されたのです。

その後、名高商や名経専の卒業生たちは、戦後日本の経済発展の中心となって活躍しました。『週刊ダイヤモンド』一九六九年七月七日号には、東証第一部上場企業の社長の卒業学校調査が載っていますが、名高商は東北大学と並んで第九位にランクされています。

おわりに

以上本書は、名古屋大学経済学部の前身校の約三〇年間にわたる歴史を、その基礎を築いた初代校長渡辺龍聖と、その所在地である名古屋市との関係に注目しながら概観しました。

もちろん、限られた紙幅の中ではその全貌を紹介することは難しく、取り上げることができなかった歴史が多くあることは言うまでもありません。それらについては他日を期するとともに、皆さんの御教示を得たいと思います。

現在でも名古屋大学経済学部・大学院経済学研究科は、名古屋市やその周辺地域、ひいては日本の経済をにない、さらには世界に羽ばたける人材を輩出し続けています。その歴史的系譜が、その前身校にあたる名高商や名経専に見られることを理解していただけたなら、ひとまず本書の目的は達せられたかと思います。

主要参考文献

◎名古屋大学史編集委員会編『名古屋大学五十年史』通史一・二、部局史一（名古屋大学、一九九五、八九）
◎作道好男・江藤武人編『名古屋大学経済学部五十年史』（財界評論新社、一九七七）
◎渡辺進（「其湛」編輯局）編『剣陵十周年史』（其湛会、一九三一）
◎竹内常善「日本経済と名古屋大学経済学部の接点」（『名古屋高等教育研究』二、二〇〇二）
◎新修名古屋市史編集委員会編『新修名古屋市史』第五巻・第六巻（名古屋市、二〇〇〇）
◎愛知県議会事務局編『愛知県議会史』第四巻（愛知県議会、一九六二）
◎小樽高商史研究会編『小樽高商の人々』（小樽商科大学、二〇〇二）
◎武田勝彦「東京専門学校海外留学生の航跡」（『早稲田大学史紀要』二八、一九九六）
◎中村治人「実業専門学校経営論に関する史的考察ノート―渡邊龍聖『乾甫式辞集』に見られる商業専門教育論―」（『名古屋大学史紀要』五、一九九七）
◎渡辺龍聖『批評的倫理学』（改訂版、開発社、一九二一）
◎渡辺龍聖『乾甫式辞集』（名古屋高等商業学校、一九二九）
◎加藤詔士「外国人教師のみた名古屋大学」（『名古屋大学史紀要』一一、二〇〇三）
◎小島清編『学問遍路　赤松要先生追悼論集』（世界経済研究協会、一九七五）
◎高橋義雄『名古屋大学―スポーツの歩み』（名大史ブックレット三、二〇〇一）
◎名古屋大学大学文書資料室編刊『ちょっと名大史』（増補版、二〇〇四）

著者略歴

堀田　慎一郎（ほった　しんいちろう）
一九六九年　愛知県豊橋市生まれ
二〇〇〇年　名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程修了（歴史学）
現在　名古屋大学大学文書資料室助手
専攻　日本近代史、記録史料学

名大史ブックレット10
名古屋高等商業学校
――新制名古屋大学の包括学校②――
二〇〇五年三月三一日　第一刷発行

著　者　堀田　慎一郎

編集発行　名古屋大学大学文書資料室
〒464-8601　名古屋市千種区不老町
電　話　〇五二（七八九）二〇四六

印刷所　株式会社　クイックス
〒456-0004　名古屋市熱田区桜田町一九―二〇
電　話　〇五二（八七一）九一九〇

【名大史ブックレット既刊一覧】

①『これまでの大学院・これからの大学院』山口拓史　二〇〇〇年一二月刊
②『名古屋大学　キャンパスの歴史1（学部編）』神谷　智　二〇〇一年二月刊
③『名古屋大学　スポーツの歩み』高橋義雄　二〇〇一年三月刊
④『豊田講堂と古川図書館―名古屋大学の寄付建物―』堀田典裕・木方十根　二〇〇一年一二月刊
⑤『名古屋大学最初の外国人教師―ヨングハンス先生とローレッ先生―』加藤鉦治　二〇〇二年三月刊
⑥『草創期の名古屋大学と初代総長渋沢元治』神谷　智　二〇〇三年三月刊
⑦『名大祭―四〇年のあゆみ―』山口拓史　二〇〇三年三月刊
⑧『岡崎高等師範学校―新制名古屋大学の包括学校③―』山口拓史　二〇〇四年三月刊
⑨『豊田講堂―Toyoda Auditorium―』山口拓史　二〇〇四年九月刊

表紙表：大正期の名古屋高等商業学校本館
（名古屋大学経済学部提供）
表紙裏：現在の名古屋大学経済学部